

LGBT運動とジェンダー

三橋 順子

渋谷区が「パートナーシップ証明書」の交付を始める2015年11月5日の直前、私はこんなことを思った。「予想される第1号は、あの有名なレズビアンカップルだろうが、もしも彼女たちより先に容姿的にさえない中年ゲイカップルが窓口に並んでいたら、どうするのだろうか？」

渋谷区もメディアも、そしてご当人たちも「第1号カップル」は見目麗しい女性カップルであることを望んでいたと思う。実際は、第1号カップルは別室で待機していて報道陣の前に姿を現す段取りになっていたのも、私が心配したような事態は起こりようがなかった。

それ以前から今に至るまで同性パートナー、同性婚をメディアが取り上げる際、イメージ画像として純白のウェディングドレスで美しく装った女性カップルの登場が圧倒的に多い。タキシード姿の男性カップルはほとんど登場しない。そこに明らかなジェンダー・バイアスがあるし、レズビアンであっても異性愛の男性の視線（一方的な「美」の評価）を免れることができない現実がある。トランスウーマンの場合も、女性への容姿適合度がシビアに問われるだけでなく、「美」までが求められる。レズビアンやトランスウーマンへの注目が「美」である一方で、ゲイやトランスマンのそれは「収入・社会的地位」である。収入や社会的地位に恵まれた「エリート・ゲイ」がメディアに注目される傾向は否めない。

こうした性的マジョリティ社会の歪んだ価値観にLGBTが絡め取られている状況には、ジェンダー論を学び、教えているトランスウーマンとして複雑な思いがある。「メディアに取り上げてもらい、世の中の理解を増すためには、相手の価値観に乗るのも仕方がない」という意見もあるが、それも程度問題だ。

LGBT運動の目的は、特別な権利を求めているのではなく、人権に基づいた「法の下での平等」の実現にある。しかし、そこにジェンダー平等が保たれていなければ、説得力は大きく損なわれてしまうだろう。



PROFILE

みつはしじゅんこ：1955年埼玉県生まれ。性社会・文化史研究者。明治大学非常勤講師。専門は日本におけるジェンダー&セクシュアリティの歴史、特にトランスジェンダーの社会・文化史。著書に『女装と日本人』（講談社現代新書、2008）、共編著に『性欲の研究 東京のエロ地理編』（平凡社、2015）、主な論文に「性と愛のはざまー近代的ジェンダー・セクシュアリティ観を疑うー」（『講座 日本の思想 第5巻 身と心』岩波書店、2013）など。